

若手句会実況中継 令和元年11月8日(金)

指導者…小澤 實・藤本 美和子氏 出席者数 19名

高得点句

1位 敗荷の音敗荷を動かしぬ 木本隆行 8点

(受講者6点、小澤・藤本選)

講評…敗荷のカラカラという音がまたカラカラの音を誘って、寂しい風景が広がって行くのが見える。敗荷に風が来る様子が見えるところが面白い。(受講者) 敗荷の本意が生かされている句だ。

「敗荷」という言葉をリフレインして音に絞ったことで、風の動き、敗荷の動き、そして蓮池の広がりまでがみえてくる。とても省略が効いている。(藤本) リフレインや単純化が効いている良い句と思うが、中に風が隠されている「技」が見えてしまったのが気になる。僕だったら「敗荷の動きをる」として「音」と「動かしぬ」の主語・述語関係は断ち切りたい。(小澤)

2位 冬の月置けば崩るる鍵の束 倉持梨恵 7点

(受講生6点、小澤選)

講評…「置けば崩るる鍵の束」という視覚的なのに音まで聞こえてくる感じが良い。「鍵の束」の句は冷たさを詠んだものなどはよく見るが、束が崩れるところに焦点を当てたのが新しいと思う。(受講者) 描写が確かな句なのでいただいた。しかし上五「冬の月」下五「鍵の束」という両方とも「の」で繋がった名詞という形の悪さがある。この左右対称感をなくすには、上五を「月冴えぬ」などと直した方がいい。(小澤) やはり切れがないのが気になった。「冬の月」が「置けば」に一瞬懸かるような感じがするので、「月冴えぬ」として切れをしっかりとった方がよい句になる。(藤本)

2位 新しき画布に鋌打つ冬はじめ

吉田哲一

7点

(受講者5点、小澤・藤本選)

講評：秋描いたスケッチに、冬になって絵の具を入れていく緊張感を「冬はじめ」に感じた。(受講者)「新しき画布」はいい句材だ。冬という季節の楽しみに応えている感じもあり、具体的でもある。「はじめ」と「新しき」がベタなところが気になる。もう一工夫必要と思う。(小澤)「新しき画布」には余白が感じられ、冬初めの明るさがあつてこのままで良いかと。嫌みが無くて良い句だと思う。(藤本)

4位 のしのしと行く千歳飴引きずりて

大堀 剛

5点

(受講者3点、小澤・藤本選)

講評：七五三の着物を着た子供は、本当は窮屈なだけで楽しくないかもしれないと感じた。兜などをかぶらされてよろよろする男子を思い出し可笑しくなった。(受講者)この句は面白い。和服の男子が重そうにしている描写が良く出来ている。(小澤)一読分かりにくかった。皆なのお話をきいて着慣れない正装の姿と理解出来た。もつと「のしのしと」が具体的だと分かるのかと思う。(藤本)